

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 3 日現在

機関番号：35413

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530797

研究課題名(和文) 対人援助専門職の新たな連携と協働の技法に関する臨床福祉社会学的研究

研究課題名(英文) A study of clinical welfare sociology on the techniques of new cooperation and collaboration for human service professionals

研究代表者

矢原 隆行 (YAHARA, Takayuki)

広島国際大学・医療福祉学部・教授

研究者番号：60333267

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、リフレクティング・プロセスを用いた対人援助専門職のための新たな連携と協働の技法の開発を目的として実施された。主たる研究成果は次の通りである。1. リフレクティング・プロセスに関する先行研究の整理とこの方法の特徴に関する理論的吟味、2. 福祉現場におけるアクションリサーチを通じたリフレクティング・プロセスの実践と有効性の検証、3. 実践と検証を踏まえた医療・福祉現場で活用可能なプログラムの開発。

研究成果の概要(英文)：This study was conducted for the purpose of development of the technique of new cooperation and collaboration for human services professionals with the reflecting process. The main research results are as follows. 1. Theoretical examination of the characteristics of reflecting process using previous research, 2. Verification of the effectiveness of the practice of the reflecting process through the action research in the welfare field, 3. Development of serviceable reflecting process programs in the medical and welfare field.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：リフレクティング・プロセス リフレクティング・チーム 臨床社会学 連携 協働 アクションリサーチ ナラティブ ケア

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 社会のおよび学問的背景

近年、対人援助者が抱える諸々のストレスや「燃え尽き症候群」といった困難さについては、きわめて広く認識されている。対人援助に携わる人材の不足、福祉職や看護職等における離職率の高さは社会的課題として顕在化しており、その要因として対人援助専門職が抱える様々なストレスや、対人援助専門職を取り巻く多様なレベルでのサポート不足、専門職間の連携・協働の不十分さ等が指摘されている。こうした現状を踏まえるとき、「ケアする人びと」をケアし、サポートするための具体的な連携と協働の技法の充実について検討することは急務である。

これまで、こうした課題に対して、対人援助専門職の「ケア」は、職場におけるメンタルヘルスなど個人の心理的ケアに焦点を置いた取り組みに還元されがちであり、対人援助専門職内部の「サポート」については、各現場においてその役割を担うべきスーパーバイザーの質的・量的不十分さが各領域で指摘されており、対人援助専門職の現場での「連携・協働」にいたっては、まだまだその実態が漠然とした状況にあるといわざるを得ない状況である。

こうした状況を踏まえ、研究代表者がその有効性を検討しているのが、トム・アンデルセンによって提唱された「リフレクティング・プロセス」という画期的コミュニケーション方法である (Andersen 1987)。この方法のエッセンスは、異なるコミュニケーション・システム (複数のチーム) 間のヘテラルキカルな会話の仕組みにある。すでに世界各地の対人援助領域で応用が試みられているこの方法について、国内では、未だその実践も研究もきわめて限定的な範囲でしかなされていない。

#### (2) 本研究開始までの研究成果

研究代表者は、理論的にも実践的にも国内におけるリフレクティング・プロセス研究のパイオニアとして、これまで多領域の研究者らと学際的研究会を組織し、この方法の理論的吟味と応用可能性の探究を継続してきた (矢原ほか編 2008)。とりわけ、この方法を用いた対人援助者との実践としては、2007～2009 年度まで科学研究費補助金を得て電話相談ボランティア団体との協働的アクションリサーチを遂行し、相談現場での実践の手引書の作成までをおこなった (矢原監修 2009)。また、対人援助の専門職についても、介護福祉職を対象とした「ケアする人のケア」のワークショップ (2007～)、精神保健福祉領域での職種内および職種間連携をテーマとした共同研究 (矢原ほか 2010) 等に

すでに試行的に取り組んでおり、複数のケーススタディを通して、対人援助専門職の連携促進に対する本方法の一定の有効性を確認していた。

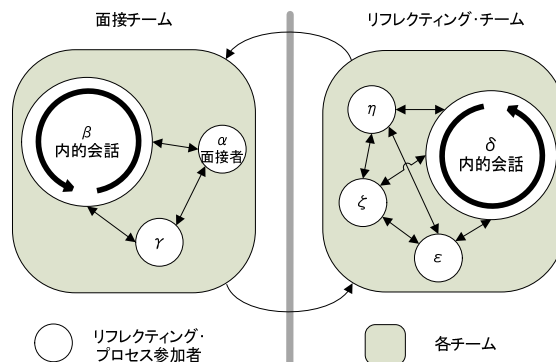
### 2. 研究の目的

これまでの研究成果を踏まえ、本研究では、対人援助専門職 (とりわけ多面的な支援をおこなううえで職種内および職種間の協働の遂行が不可欠な社会福祉専門職) における連携と協働のための新たな技法として、リフレクティング・プロセスの応用可能性に焦点を置き、その効果を詳細に検証するとともに、連携・協働の複数の次元における活用場面に応じた本技法の適用と禁忌についても明らかにし、現場で活用可能な具体的かつ汎用性の高いプログラムを開発する

### 3. 研究の方法

(1) 新たな連携と協働の技法の有効性の検証のため、本研究では、その前半部分 (2011 年度から 2012 年度) において、対人援助専門職の新しい連携と協働の技法としてのリフレクティング・プロセスの有効性の体系的検証をおこなった。また、検証作業の準備として、国外における当該テーマに関する先行研究の包括的レビューをおこなう。

(2) 現場での技法活用を可能にする具体的なプログラムの開発のため、本研究では、その後半部分 (2012 年度から 2013 年度) において、前半の検討を踏まえ、実際の対人援助現場で活用可能なリフレクティング・プロセスを用いた連携・協働技法の具体的なプログラム開発をおこなった。そのうえで、当該プログラムを実際に試行し、必要な改善を検討する。プログラムにおいて用いられるリフレクティング・プロセスの基本形式は以下の図のようなものである。



### 4. 研究成果

(1) リフレクティング・プロセスに関する参加型アクションリサーチの実践:

鹿児島県下および京都府下の複数の高齢者福祉施設において、介護職・看護職間の多職種間連携における課題をテーマにグループ・インタビューとリフレクティング・プロセスの実践、さらに、実践前後におけるアンケートによる効果測定を実施

・目的：対人援助専門職のための新たな連携と協働の技法の開発のための現状把握と実践の手順およびその有効性を検討するため

・対象：近畿地区および九州地区の5法人の特別養護老人ホームの施設長5名および看護職13名、介護リーダー16名

・期間：2012年8月～12月

リフレクティング・プロセスに取り組んだプログラムの基本手順は、以下の通りである。

・第一日目：午前中、施設長インタビュー、午後、各職種へのグループ・インタビューと事前アンケート

・第二日目：リフレクティング・プロセスの実施（実践終了約一週間後に事後アンケートを記入して郵送で返送）

広島県下の病院を含む複数の機関に所属するメンバーからなる精神保健福祉専門職グループとリフレクティング・プロセスに関する研究会を定期的に開催し、そのなかで事例検討型のリフレクティング・プロセスを実施、記録をするとともに、そのデータの協働的な質的分析をおこない、リフレクティング・プロセス参加者の各視点からの多声的分析を実施

以下では、一事例のみに関してその概要と効果の分析結果を示す。

・事例検討参加者：

A病院 PSW3名（以下、PSW-E・G・H）

B施設 PSW1名（以下、PSW-F）

C病院 PSW3名（以下、PSW I・L・M）

臨床社会学研究者1名（以下、CS K）

・事例の概要：

クライアント（以下、D氏）はA病院に通院中の50代の男性である。精神状態は服薬も必要ないほどに安定し、今後精神障害者保健福祉手帳（以下、精神障害者手帳）を更新しても認定されない可能性がある。X-2年よりB施設と同じ法人内にある作業所への通所を開始している。始めは積極的ではなかったものの、周囲のすすめもあり日数を増やすまでになり、作業所内では他メンバーや職員から頼りにされている。本人も頼られることにやりがいを感じており、現在では楽しみながら通所することができている。そこで、主治医をはじめとしたA病院職員は、精神障害者手帳が認定されなくなるにより生活保護の障害者加算が受けられなくなることを心配しており、障害者の就職支援が受けられるうちに就労に向けて動き始めた方がいいのではないかと考えている。そのため、

就労継続支援A型事業所への見学等を促すが、D氏には働いて稼ぎたいという気持ちはあまりなく、作業所の利用と生活保護を受け続けながら生活していきたいと考えている。

・実践の流れ：

まず、A病院 PSW1名（経験年数：4年未満、以下、E）とB施設 PSW1名（経験年数：3年未満、以下、F）が、A病院とB施設が関わるD氏の支援について検討する。しかし、E、Fはともに経験年数が浅いため、スーパーバイザーとしてC病院 PSW1名（経験年数：15年未満）が加わったチーム（以下、ファースト・オーダー）で話し合う。その様子をワンウェイ・ミラー越しにA病院 PSW2名とC病院 PSW2名、臨床社会学研究者1名の計5名のチーム（以下、セカンド・オーダー）が観察を行った。続いて、セカンド・オーダーがファースト・オーダーの会話について観察したことを話し合い、その様子をファースト・オーダーが観察するというプロセスを数回繰り返した。

・実践効果の分析：

【事例提供者への効果】多機関における連携を促進する方法としてRPを応用した事例の検討を行った結果、事例提供者のPSWからは「各機関が考える支援を客観的に捉え、支援の方向性を共有することができた。」「セカンド・オーダーの観察から、第三者の視点を通じた新たな気づきがあった。」といった振り返りが得られた。また、ファースト・オーダーに所属の異なるスーパーバイザー（以下、SVR）役のPSWが参加したことについては、「SVRがEとFの考えや感情を受け止め整理することで、全体が客観視できた。」「所属の異なる3者間での会話を通して、新たな選択肢が発見できた。」等、スーパービジョンとは違った効果が得られた。本実践により、同一事例に関わる他機関の専門職間において支援の方向性や考え方の共有ができた等の効果がみられ、多機関連携においてRPの応用可能性と効果を確認できた。

【スーパーバイザーへの効果】ファースト及びセカンド・オーダーにおける会話の観察を繰り返し相互に評価することで、多機関であるがゆえにおこる交錯した情報を整理することができた。また、自身の抱えるスーパーバイザーとしての課題を認識し、視点を見直すことができた。

【リフレクティング・チームへの効果】本実践により、新たな情報や発想を得ることができ、また、業務の中では見えにくい気づき等をそれぞれが得ることができたことにより、リフレクティング・チームとして参加した担当PSWへの引き継ぎの効果がみられた。

（2）リフレクティング・プロセスの有効性の検証：上記のプロセスの映像、音声による

記録の質的分析、参加者へのアンケートとインタビューのデータ分析を通して、本技法の有効性について検証をおこなった。

アンケートの結果、リフレクティング実施前後における SRS は、

・「抑うつ・不安」  $t(26)=0.782, p=0.441, dDiff=0.16$

・「不機嫌・怒り」  $t(26)=0.510, p=0.614, dDiff=0.10$

・「無気力」  $t(26)=2.352, p=0.027, dDiff=0.46$

・ SRS 全体  $t(26)=1.507, p=0.144, dDiff=0.30$

であり、各下位尺度でも、SRS 全体でも事後においてストレス反応得点は減少傾向にあった。

(3) 上記の実践と検証を踏まえたプログラムの開発：上記の分析を踏まえ、各医療・福祉現場で活用可能な実践プログラムの開発を試みた。具体的な活用可能な領域と、その多様性は、以下の図の通りである。



(4) 北欧におけるリフレクティング・プロセスの実践状況の調査と研究交流：リフレクティング・プロセスの活用において先行する北欧の実践状況を調査するため、デンマークの医療機関、福祉機関、シンクタンク等において聞き取り調査を行った。また、デンマークでリフレクティング・プロセス研究に取り組む研究者らとともにシンポジウムを開催し、そこでの講演において、デンマークの実践者、教育者らに対して、日本におけるリフレクティング・プロセス研究を紹介した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

矢原隆行、会話についての会話をういたケアのケア リフレクティング・プロセスの臨床社会学、インターナショナルナーシングレビュー、査読なし、(156) 82-88 2012年

矢原隆行、新しいケアの仕組みを巡る参加型アクション・リサーチの試み--電話相談ボランティアの成長に係るリフレクティング・プロセスの観点から、電話相談学研究、

査読あり、20(2) 11-17 2011年

矢原隆行、ケアの社会学と社会学的ケア--だれが、だれに、なにを、いかに、いつ、どこで、なすのか、社会分析、査読あり、(38)7-24 2011年

光岡美里・知花絵美・川田恵・三根卓・森岡知江・壬生明日香・矢原隆行、精神保健福祉領域におけるリフレクティング・プロセスの応用 スーパービジョンに代わる支え合いのコミュニケーションの可能性、精神保健福祉、査読あり、42(2) 139-144 2011年

矢原隆行、リフレクティング・プロセス再考 リフレクティング・チームをリフレクティング・プロセスにするもの、家族療法研究、査読あり、28(1) 70-77 2011年

〔学会発表〕(計9件)

矢原隆行、日本におけるリフレクティング・プロセス受容と実践、リフレクティング・プロセスによる専門的支援関係の考え方と実践に関する会議 2013年9月3日

矢原隆行、離島・過疎地域におけるナラティブ・コミュニティ・ワークの可能性、日本家族研究・家族療法学会 第30回大会 2013年6月21日

矢原隆行、多職種連携のための臨床社会的処方箋、西日本社会学会第71回大会 2013年5月

矢原隆行、多層的インターフェイスとしての臨床介護福祉研究支援：SCC 実践の中間報告、第124回日本社会分析学会例会 2012年12月

矢原隆行、ディスコミュニケーションを前提とした連携のためのコラボレティブ・アプローチ、日本質的心理学会 第9回大会 会員企画シンポジウム 協働の「場」をつくる人・言葉・モノ 2012年9月

矢原隆行、多機関連携におけるリフレクティング・プロセスの応用：理論的背景と実践の枠組、第11回日本精神保健福祉士学会 学術集会 2012年6月

矢原隆行、精神保健福祉援助実習の振り返りのためのコラボレティブ・アプローチ、第29回日本家族研究・家族療法学会自主シンポジウム『ソーシャルワーカー養成において家族療法をどう教えるか』 2012年6月

矢原隆行、ディスコミュニケーションの場をひらく臨床社会的プログラム、第38回日本保健医療社会学会大会 2012年5月

矢原隆行、リフレクティング・プロセス再考、第28回日本家族研究・家族療法学会大会自主シンポジウム『リフレクティング・プロセス再考』 2011年6月

〔図書〕(計1件)

日本家族研究・家族療法学会編、家族療法テキストブック、金剛出版、2013年、360

ページ、第1部 理論編 第3章 第2節「リフレクティング・プロセス」、および、コラム「オートポイエーシス」を執筆。

6．研究組織

(1)研究代表者

矢原隆行 (YAHARA, Takayuki)

広島国際大学・医療福祉学部・教授

研究者番号：60333267